

文庫めぐり

(12)

名古屋市蓬左文庫

「来歴と概要」蓬左文庫は尾張徳川家の旧蔵書「尾張藩御文庫」を中心に和漢の優れた古典籍を所蔵する公開文庫である。蔵書の核となるのは、晩年、駿府に隠居した徳川家康が収集した駿河文庫の書物を死後、將軍家と御三家に分譲した「駿河御讓本」である。家康の九男、尾張家藩祖義直は、元和年間（一六一五—二四）家康の遺品として譲り受けた駿河御讓本三千冊を中心に名古屋城内に御文庫を創設、さらに、一代で約一万九千点余の蔵書を加えて、その基礎を確立した。以後二五〇年、歴代藩主を中心とした書物の収集により、幕末期御文庫には、五万点を越える蔵書があったという。明治維新後、御文庫の蔵書は、一部の尾張藩の役所や別邸の蔵書と共に、尾張徳川家の所蔵となり、大正初年、当時の当主徳川義親氏により、「蓬左文庫」と命名された。蓬左は名古屋の別称である。

昭和十年、徳川美術館が尾張徳川家の大名道具を中心に名古屋大曽根の尾張徳川家邸内に開館したのと同時に蓬左文庫は、東京目白の同家邸内に開館、公開文庫となった。同二十五年、名古屋市に移管され、翌年から旧大曽根邸内の現在地で名古屋市蓬左文庫として一般公開された。昭和五十三年の名古屋市博物館開館とともにその分館となつ

た。

蔵書数は「小酒井不木文庫」などを含めて約十万点。江戸時代を中心に、十二世紀以降の和漢、朝鮮の古典籍、古絵図、一八・一九世紀の蘭書などがある。めずらしい医学書も多く、収蔵のレメリン (Remelin, J.) 原著『紅毛銅人形図』は、天和二年（一六八一）、通詞本木庄太夫が翻訳した解剖書の写本で、オランダ医書からの日本最初の翻訳書である。蔵書中、七件、一五四点が重要文化財となっている。蓬左文庫によつて家康や義直が蔵書（知識データベースと言えらるであろう）の重要性を高く認識していたことがよくわかる。

『蔵書目録』『名古屋市蓬左文庫国書分類目録』、同文庫編、一九七六・八七。『名古屋市蓬左文庫漢籍分類目録』、同文庫編、一九七五・八七。『名古屋市蓬左文庫古文書古絵図目録』、同文庫編、一九七六（いずれも有料にて頒布）

『所在地』〒四六二〇〇三 名古屋市中区徳川町一〇〇一

☎五十一六五二一三七

「利用法」閲覧は館内のみで、館外貸し出しはなく、学術研究または調査を目的とするものにはだれでも許可される。複写は保存上支障のないものについてはマイクロフィルム複写などの方法により可。電話、郵送による申込も可。

(山内 一信)